

橋が架かることは、嬉しいこと。

赤茶色のレンガをひとつひとつ積み上げるたびに彼女と彼女の距離が縮まっていくのが分かる。私の思いが少しずつながっていくのが。

——ああ、でも。

もし許されるなら、この世界でたったひとりの善人になんてならなければよかった。

ランタンの灯が揺れる。錆びた鉄の鎖が軋む音が今夜はいつにもまして心地よい。普段は壇上で肌を晒す踊り子も、外からじっと店の中を眺めているだけの乞食も、みんなが陽気に歌いながら酒を浴びるように飲んでいく。きつと今日だけは口うるさい妻も赤くなったやかんのように喚きながら亭主を迎えに来ることはないだろう。隣村との橋が架かるということは、それぐらいめで

たいことだった。

深い谷やけわしい山々に囲まれた私の村は、隣村に行くには危険を冒して山を大きく迂回しなければならなかった。山道は悪路で道幅も狭い。馬車の類は通ることができなかつたし、当然女子供や老人は村から出ることすら難しい。そんな私の村で橋を架けることとは村人の切なる願いだった。

夜が更けていっても店の賑わいがなくなることはなかった。普段なら店主が居座る客の尻を蹴って店の外に追い立てる時間になつても、今夜はそんな様子は微塵も感じられない。それどころか客と一緒にジョッキ片手に肩を組んで踊っている。あんな有り様で客の勘定はできるのだろうか。乞食たちが交じっているというのは、そういうことなのかもしれない。

さて、私はといういつものように酒を飲んでいるのだが、みんなのこの喧騒が誇らしかつた。ぬるいビールをおおひ余韻にひたりながら店内を見渡す。隣りのテーブルに座る農夫と商人の二人組みの会話が聞こえてき

た。

「ヤー。王様も立派な橋をこさえてくれるもんだ。これでようやく隣村に荷馬車を引いて行ける。果物もたんまり売れるべ」

「いんやあ、いつちばん良いこたあ街の商人が扱ってる肥料を手に入れることができることだあ。この村じゃあ肥料なんて自分たちで作るのが当たり前だったからなあ」

橋ができれば確実に村は発展する。二人は少年時代に戻っているかのように目を輝かせていた。

「おい、あんた」

私が二人の様子をうかがっていたことをさとられたのか、大柄な農夫ががっちりとした手で私の腕を掴み自分たちのテーブルに引き寄せる。

「ええはい、なんででしょう」

突然のことに驚き身を固まらせた私をあいっている椅子に座らせて、目の前にこんと小気味良い音をたててラムの入ったグラスを置いた。

「ひとりだけピスなんて飲んでんじゃねえ。まわりの奴らみんな、女でさえ馬鹿みたいに酔っ払ってやがる。男なら強い酒かつくらっちゃまいな」

大仰だが人の良さそうに顔をくしやめて勧められると私も悪い気はしない。言われた通り一気にグラスをあおる。ビールとまったく違う強い酒にくらつとしながら農夫にグラスを差し戻す。まさか本当にかつくらうとは思ってもみなかったのだろう。その様子に農夫は目を丸めて驚いていた。

「へえ、兄ちゃんやるねえ」

商人の男が手を叩いてはやしたてる。強い酒のせいでいくらか気が大きくなつたのだろう。テーブルの上にまだラムの瓶がなみなみと残っているのを見て、私はさきほど空にしたグラスをいっぱいになるまで満たした。

「あなたたちもいかがですか、もちろん？」

「へっ、吹くねえ。兄ちゃん俺らをつぶそうってかい？ おい、こりやあ大変なもん拾っちゃまったみたいだぞ」

商人が口笛交じりに農夫に視線を移す。

「おもしれえじゃねえか」

農夫の言葉聞いてこれはあれだなと思う。今日はめでたいのだから、いくら飲んだって良い。いくら酔ったって良い。村じゅうが橋が架かるのを心待ちにしている、歓喜している。私の作る橋は村じゅうの助けになり、彼女だって幸せになれるに違いない。そう思うことで私はまどろむ意識のなかで自分に言い聞かせた。

——嬉しいのだ。

\* \* \*

家の中に差し込む月明かりがほとんどなくなつてから、わたしはようやく機織りをやめた。ずっと同じ姿勢をとっていたからか、それとも単にわたしが歳をとってしまっただけなのかいやに肩が重い。赤ん坊と母はすでに寝静まっている。薄暗い家内にひとり起きているといつも決まってわたしはあの人のことを考えてしまう。

病気はしていないだろうか。

きちんと食事はとっているだろうか。

いつ帰ってきてくれるのだろうか。

夫は最初ただの農夫だった。多いとはいえないまでも十分な量の野菜や果物を作っていたし、馬や羊だつて何頭かは持っていた。けれどもわたしと結婚してすぐに彼は隣村まで出稼ぎに行かざるをえなくなった。そのことが彼に対して申し訳なくてたまらない。

だからわたしはこの寂しさをずっと我慢していなければならなかった。

この数年でわたしはできるだけ多くの手紙を彼に送り続けた。それは天気のことであつたり、村のことであつたり、家族のことであつたり。彼はまめなほうではなかつたけれども、わたしの手紙にはすぐに返事をくれた。そのことが嬉しく心にあたたかな日差し込んでくるような心地になったものだ。しかし一方で、彼のへたくそな文字を目で追うたび会いたいと思う気持ちを抑えることが難しくなっていた。いったい何度思ったことだ

ろう。母を放り出して彼のいる隣村まで行こうとしたのは。けれどそれはついぞできなかった。女のわたしや幼い子供では村々を断絶する山を越えることは難しい。わたしはともかく子供たちに何かあったらと考えると、どうしてもわたしはただ待っていることしかできなかった。

そんなときこの村に橋が架かるという話を聞き、わたしは歓喜に打ち震えた。「お父さんに会いに行けるのよ」そう子供に伝えたとき子供が首をかしげたことが少しだけ心を引く掻いたが、わたしは逸る気持ちを抑えることができなかった。それからというもの、わたしは何度も子供を抱えてレンガがひとつずつ積み重なっていく橋を眺めに行った。それは彼からの手紙を待っているときよりも、ずっと彼を近くに感じられることだった。

\* \* \*

故郷の村をひとり離れてもう何年になるだろうか。残

してきた家族のことを思うとやるせない気持ちになる。この村での生活は胸につかえる感情さえ度外視すれば、快適とはいかないまでも苦しくはなかった。石切り場の仕事は支払いが良い。これほどの稼ぎがあれば妻と幼いわが子を十分に食べさせていくことができるばかりか、義理の母の面倒を見てやることもできる。

そう、俺は本当なら亡くなった両親の残した土地で愛する妻と共に芋や野菜を作って、村で普通の生活を送っているはずだったのだ。連れ添って最初のころは良かった。父の代よりも農地を広げ、市場で働いていた妻を娶り、彼女の母と三人で慎ましいながらも幸せな日々を送っていた。妻はよく働いていたし、義理の母も早くに親を無くした俺を優しく気遣ってくれた。思えばあのころの生活は、俺が子供のころに思い描いていた夢というものを叶えていたのかもしれない。ただひとつ違う点があるとすれば子供がいなかったことだが、こればかりは授かりものなのだからしょうがないと割り切っていた。

そんなありふれた日々が終わったのは、やけに暑い日

の朝のことだった。妻に大事な話があると言われ、早くに起こされテーブルに座って朝食が出るのを待っていたのだが、妻が俺に話したのは子供ができたという知らせだった。俺は大いに喜び、母はもう知っているのかと尋ねた。妻は「知っているわ」と答え、そこで俺たちはようやく母がまだ起きてこないという異変に気づいた。

いやに生温い風が身体を撫でる。窓を閉めようと席を立つと傍らで酔いつぶれていた相席の女が服の裾を引っ張った。

「もう帰るん？」

「明日も仕事があるからな。そう遅くまで酒ばかり飲んではおれんさ」

女は俺がやつかいになっっている宿屋の女中だった。こちらに来て知り合っ間もないころから、彼女はなぜか俺の世話をよくしてくれた。いや、なぜかなんて本当は分かっている。それでも俺は残してきた妻のことを考えると彼女を受け入れてはいけないと、彼女の薄桃色の口元から漏れる息遣いや布ごしに伝わる若い乳房のぬく

もりを感じるたびに逸る自身に言い聞かせてきた。そんな俺のことをこの女は正しく感じ取っているのだろう。俺の夫としての義がいつまでもつかのか、俺にはそれがこの上なく恐ろしかった。

\* \* \*

はじめはちゃんと架かるのかどうかさえ分からなかった橋の建設も、このごろではようやく完成の目処がたつようになってきた。商人たちはことあるごとに隣村まで向かい、儲け話を持ち帰ってくる。商人にどうして橋が渡れるようになってから隣村に行かないんだと尋ねると、彼らはみな一様にそれでは遅いのだと言っていた。私にしてみればなぜ遅いのかは分からなかったが、彼らにとっては今苦勞して隣村と行き来をすることに大きな意味があるのかもしれない。

荷車に瓦礫の山を積み丘を下っていると、一本道の向こうから彼女がやって来た。この先にあるのは私たちが

作っている橋だけだ。彼女がこちらに気づき、私も軽く手を振り応える。

「やあ、今日も見に行くのかい？ 毎日あんな村のはずれまで来て大変じゃないかい」

両腕に抱えている赤子に視線を向けると、彼女は首を振って微笑んだ。

「そうね、近ごろではこの子も大分大きくなってきたしひとりで抱えて歩くには骨が折れるわ」

「旦那さんに会いたいかい？」

ええ、とたった一言だけ彼女は答えた。

「そうかい。それならやっぱり橋を作ってよかった。ここ最近君は本当に寂しそうにしていたから、私はずっと君と旦那さんを会わせてあげたいと思ってたんだよ」

私の言葉に彼女は子を抱えたまま頭を下げる。垂れ落ちる髪から風に乗って彼女のおいが鼻をかすめ、私の胸に懐かしくも針のような痛みがさす。自分の発した声音があまりにも普通で、驚く。長年耐えてきた痛みのもとと煩わしくもあきれることだろう。彼女から離れたい

と思う一方で、私はこのままずっと彼女と言葉を交わしていたかった。

「よかったら今夜うちに来てはくれないかしら。大切な友達にぜひお礼がしたいの」

私の淡い恋心に彼女は気づいていないのだろう。

でなければなんと惨い仕打ちだろうか。彼女の誘いを私が断れるわけもないのに。

その後私たちは二、三言言葉を交わして、再び荷車を引いてその場を後にした。積み上げた瓦礫のがしやがしやという音を聞きながら、別れ際の彼女の顔を思い返す。

『この子は夫の顔を知らないの』

やるせないでしょう、と続ける彼女にかつての純な面影はなくなった待ち疲れた女の顔をしていた。

実は私は一度だけ隣村に行ったことがある。橋を作る前に隣村の役人と話をするために行っただけだが、そのとき私は彼女の旦那を宿屋で見かけた。しばらく彼はひとりで酒を飲んでいたが、屈強な体軀をしているはずの

その背中はいまにも小さく、彼をとりまくすべてが彼を押しつぶしてしまひそうだった。本来であるならば私は残してきた家族について彼に話してやるべきだったのであろう。でもその傍らに若い女中が寄り添っているのを見て声をかけることができなかった。彼は困っているような面持ちで彼女に接していたが、女中のほうはめげずにずっと彼に話しかけていた。二人の姿は愛し合う男女というよりかは、思いやりあう親子のそれによく似ていた。

家族と遠く離れた場所で妻と家族のために必死に働く小さな男を、咎めることが私にはできなかった。一体この世界で誰が、たったひとりで生きていくことができようか。隣村からの帰路のなかで私は彼女に思いを馳せ、この日目にした彼のささやかな弱さは自分のなかに秘めようと、彼らにとって善人дейよう」と誓った。

\* \* \*

子供の食べ残した朝食を片付けながら、わたしは昨夜のことを思い返していた。誰が見ているわけでもないのに、二の腕に残る彼の痕を手のひらで覆い隠す。情事をすませ彼が帰っていった後、熱い湯の染み込んだ布で何度も身体を拭ったが、昨夜のにおいはちゃんと消えたのだろうか。幼い子供には分かるはずはないと知っていても、どこか不思議そうな目でじつとわたしを見つめていた赤子が、わたしは怖かった。

自分でもよく理解している。彼がわたしの寂しさにつけこんだわけではない。わたしが自分の寂しさを言い訳に彼の優しさにつけこんだのだ。それだけでなくこの期に及んで、わたしは自身を咎める一方で今までよく耐えてきたとさえ思っている。子を産み乳房の張った女の身体で夫の帰りを願わない夜はなかった。長年待ち焦がれた異性の力強い体躯と鱧<sup>す</sup>えた<sup>す</sup>た<sup>す</sup>においのなんと甘美なことだったろうか。つまるところわたしは最後の最後でひとり耐えることができなかったのだ。

食器を棚に戻し終え、盆を手母のいる二階へと向か

う。木の板でできた階段が軋むたびに胸の奥が掻き毟られる。野菜が少しだけ浮いた琥珀色のスープに自分の顔が歪に映って揺らめいている。ああ、せめて一度鏡を覗いてから母に食事を持っていくべきだった。彼女は娘の顔を見てなんと言うだろうか。やはりわが子の不義をこんこんと責めるだろうか。母の居室の古い扉がわたしにはやけに重く感じられた。

「母さん、入ります」

いつもとは違う掠れた声に喉奥がどろどろに溶けてしまったかのような錯覚に陥る。こんなところにも異性の痕は残っているのかと、自分の可笑しさに思わず笑みが漏れる。ベッドの上に横たわる痩せた母は、わたしの来訪にも反応せず何をするわけでもなく目を開けぼんやりと天井を眺めていた。

「起きていたのね。朝ごはん遅くなってごめんさい」

母の身体を起こし、コップを手渡す。のろのろとした動きで彼女は水差しの水を注ぐと、やがてゆっくりと声を発した。

「いつもすまないねえ。わたしはあなたに迷惑をかけてばかり。……あなたの夫になった男にも」

母の痛みをこらえるような声音に、やはり彼女は昨夜のすべてを知っているのだと、わたしは服の裾を固く握り締めた。

「わたしの身体がこんなでなかったら、あの人は家族を残してわざわざ隣村に行かなくてもよかった。昨夜あつたことはわたしのせいになさい。そして絶対に打ち明けてはいけない。この家であなたと子供が暮らしていくためには、足の動かないわたしが生きていくためには夫に打ち明けてはいけない」

でも、と口を開きかけるわたしを彼女は手で制し、まなざしが一切の反論を禁じていた。

「あなたを結婚するまで育ててきたのはわたしよ。母親を困らせないで頂戴。安心しなさい。あの男は昨夜のことを誰にも話さない、あなたを不義の妻には決してしない。わたしも昔からよく知っている、あなたにならどこまでも実直で、優しい子」



『あなたもそれをよく理解していたから、あの男を夫の代わりに使ったのでしょうか?』と最後に言い残し、母は不自由な身体を一生懸命に動かし、卑しい乞食がそうするのように口元をこれでもかと盆に置かれた器に近づけてスープを飲みはじめた。

それから橋が架かるまで、わたしは二度と彼に会いに行くことはなかった。

赤子に乗せた乳母車を引いてわたしは夫に会いに行く。子供はもう赤子とは言えないくらいに大きくなっていた。この子を見て彼はなんと言うのだろうか。それが少し楽しみであり、不安でもあった。この一本の橋に分かれ道はなく、来た道を引き返さない限り渡ってしまう他はない。

橋を渡り終わると隣村はもうすぐそこだ。こんなにも隣村は近かったのだとわたしは今になって初めて知った。

——ああ、もし赦されるなら遠くであなたを思ってい

たかった

あの夜を過ぎてからわたしはずっと自分に言い聞かせてきた。橋が架かり彼に会いに行けるということは、

嬉しいことなのだ、と。

月刊缶じうす六月号 通巻199号

2014年5月27日発行

編集人 菊田泰右 蒼井天優 夕陽

印刷所 広島大学 分団BOX